

平成25年度 第2回川崎市教育改革推進協議会（摘録）

開催日時 平成25年11月18日(月) 18:00～20:00

開催場所 明治安田生命ビル2階 第2会議室

出席者 小松委員、大下委員、伊藤委員、杉村委員、小原委員、佐藤委員、渡邊委員、
高木正之助委員

(事務局) 渡邊教育長、原田総務部長、山田教育改革推進担当部長、海野教育環境整備推進室長、
高梨職員部長、芹澤学校教育部長、渡部生涯学習部長、鈴木総合教育センター所長、
野本企画課長、田中企画課担当課長、島田指導課長、池谷生涯学習推進課長ほか

傍聴者 なし

欠席者 高木展郎委員、田中委員、松本弘委員、松本芳弘委員、門倉委員

司会 野本企画課長

- 1 開会
- 2 教育委員会あいさつ（教育長）
（報告）
- 3 教育プラン策定のスケジュール ……資料1
- 4 現行教育プランの進捗状況及び課題の整理 ……資料2、3
- 5 本市の教育施策の今後の基本的方向性 ……資料4
（協議題）課題への対応
- 6 キャリア在り方生き方教育について ……資料5

報告 教育プラン策定のスケジュール

（事務局説明）

質疑なし

報告 現行教育プランの進捗状況及び課題の整理

（事務局説明）

教育行政

委員

資料3-1は教育行政全般についての課題なので、資料3-2の学校教育、資料3-3の社会教育も両方含まれていると思うが、資料3-1には「社会教育」という言葉が入っていないため、どこかに入れた方が良いのではないか。

事務局

検討したい。

学校教育

委員

資料3-2の学校教育の課題一覧は、修正された部分があるということだが、どのような修正をされたのか。

事務局

できるだけ分かりやすくすることを主眼に、項目立てし、構成を変え、それにしたがって内容にも修正を加えた。

委員

通級児童・生徒数が資料2の21ページに示されているが、この表からも通級児童・生徒が増えていることがよく分かる。中学校は、通級指導教室が増えればさらにこの数が増えると思われるか。

委員

ニーズは高まっているので、増える可能性は十分ある。

委員

この人数から見ると、小学校で通級指導教室に通っていたのに、中学生になって通う教室がないというケースが出てくるのではないか。

委員

小学校で最近増えているのは、集団の中で生活することが苦手というお子さんである。そういう子どもたちは、中学生くらいの年齢になるとだいぶ慣れていくケースも多く、小学校の時点のニーズがそのまま中学校に上がっていくわけではない。

委員

指導の成果もあって、中学生になると必要のなくなる生徒も確かにいるとは思いますが、現在の小学生と中学生の通級人数の差を見ると、やはり中学校の通級指導教室の整備も今後の大きな課題だと思う。

委員

一方で、中学校で新たに通級が必要となるような子もいる。

委員

小学校で通級に行く経緯としては、学習ができない子について保護者と担任が相談していく中で、解決方法の1つとして通級指導教室を紹介され、通うようになり、少しずつ自立していくというようなケースが多い。

委員

中学生になったからといって、そう簡単にニーズが消えるとも思えないので、小・中で個々の子どもについての情報共有と指導がうまく受け継がれ、その子にふさわしい、年齢に応じた対応ができるようにする必要があると思う。

委員

学校教育、社会教育のどちらに入るか分からないが、児童・生徒の学習支援についても考えていただきたい。生活保護世帯の場合は、福祉の方面から学習支援が入っており、それが良い結果を出していると聞いている。学習状況調査の中でも、何割かの子どもたちが分からない部分を抱えたまま次の学年に行っているというデータが出ているので、生活保護世帯にならないぎりぎりのところの家庭の児童・生徒への学習支援をぜひどこかに入れていただきたい。

学校教育の中で支援するならば学校教育のところで考えていただければいいし、放課後に支援をするならば社会教育のところになると思う。どちらでもいいので、学力が伸び悩んでいる子どもたちを支援する環境をつくっていただきたい。

社会教育

委員

資料3-3のI-1-②の「シティズンシップ」というのは、これからの社会教育の大事なキーワードだと思っている。社会人、地域人として、市民という当事者意識をきちんと持って生きていくことが、生きがい、やりがい、健康寿命の延伸につながっていくと思う。

委員

私としては、これはカタカナ語にしてほしくない。シティズンシップ

というのは、まだ言葉として熟していない。一般的に市民性と訳されているが、あまり適切な訳とは言えず、日本の社会の文脈の中では、少し解説が必要だと思う。日本的なシティズンシップ、川崎市という都市型の中のシティズンシップというものがあると思うので、もう少し平易で豊かな言葉で表せないものか。

委員

資料5の「キャリア在り方生き方教育」の中でも、一貫して市民性という概念がある。重要な焦点の1つだと思うので、もう少し大きく扱ってもいいように感じる。

委員

私もそれが川崎というまちの大きなイメージであり原則だと思っている。漠然とした概念ではなく、川崎においては、生活や仕事も含めたシティズンシップを育むことができればと思っている。市民の学びを活動に広げるという話なので、この後の協議のところでまた議論したいと思う。

報告 本市の教育施策の今後の基本的方向性

(事務局説明)

委員

資料4のⅣでは、「教育委員会の今後の主な取組」として「学校教育」と「社会教育」の2つが明示されている。このことから、先ほどの資料3-1の「教育行政」の課題一覧の中に「社会教育」もきちんと位置付けたほうがいいのではないかと。

資料4のⅢの「自主・自立」は、「社会的自立に必要な能力・態度を育む」という説明があるものの、抽象的過ぎて分かりにくいように思う。もう少し的確に表現できるタイトルを工夫したほうがいいのではないかと。

Ⅳの社会教育の2の「新しい絆の創造」について、今、社会教育委員会では、若い世代同士や、若い世代と地域とのつながりをつくるために、社会教育や社会教育施設に何ができるかということ協議をしている。なぜ「つながり」なのかというと、つながりがあったはじめて社会教育関係資本の構築・充実を生むからである。そこがポイントなのだというのを、ここの中にも言葉として入れてもいいのではないかと。つながりづくりを支援していき、そのつながりによって社会教育関係資本が充実して、地域活動や地域コミュニティが形成されるというところまで言及してもいいのではないかと。

事務局

「自主・自立」という言葉は今さまざまところで使われており、それだけ社会の大きなキーワードになっていると捉えられることと、学校教育の分野では、「自立」という言葉だけでは扱いにくい部分もあるため、目指す方向としては社会的自立でも、「自主」という言葉を付け加えることによって、学校教育の中で自然に取り入れることができるのではないかと考え、「自主・自立」とした。

委員

Ⅳの学校教育の4つの取り組みについて、1の「キャリア在り方生き方教育の推進」と3の「特別支援教育」については変わっていくイメージが分かるが、2と4については現状からどのように変わっていくのか。

事務局

2については、「生きる力」は学習指導要領の基本的な理念になっている言葉であり、この理念そのものについては継続していくつもりである。それに加えて、学習状況調査等の実施、分析を行うことによって、今後充実させていくべき課題を把握し、取り組んでいきたいと考えている。

委員 4については、これまでの教育プランの中では防災という視点が十分ではないので、今回のプランでは、学校施設の環境整備と併せて防災の視点も取り入れていきたいと考えている。

事務局 「キャリア在り方生き方」というのはとても良い言葉だと思うが、川崎市独自の言葉なのか。また、いつから使われているのか。

事務局 川崎市のオリジナルの言葉で、今回初めて使う言葉である。

協議題 課題への対応

キャリア在り方生き方教育について

(事務局説明)

委員 とてもいいネーミングだと思うし、今の説明にも共感できる。説明の中では日本の文化の違いの話がされたが、文化の違いというよりも教育の問題だと私は考えている。そういう意味でも、小さいころから全体的にやっていくのはいいことだと思う。

事務局 「キャリアノート」について、具体的に見えない部分がある。扱いを間違えると、せっかくのいいアイデアが違った方向に行ってしまう危険性もあるので、スタイルや運用をもう少しじっくり検討する必要があるのではないかと。理念が理解されないと運用はうまくいかないと思う。

事務局 大事なご指摘だと思う。ノートをなぞってやっていたら、それがキャリア在り方生き方教育だという間違った理解をされると、教育全般を見直すということに結び付かないので、その辺りは注意しながら取り組みたいと思う。

委員 ノートのイメージはある程度できているのか。

事務局 ノートは、今、指導主事が分担して作成に取り掛かっている。少しまとまった時点で、委員の皆さんにもご覧いただきたいと考えている。

委員 具体的にはいつから導入する予定なのか。

事務局 平成26年度の上半期に、キャリア在り方生き方教育を推進するための手引きにあたるようなマスタープランを仕上げ、下半期には学校にその理念の説明や研修等を行うとともに、学校の経営方針にもこの視点を盛り込んでいただき、取り組みを始めていただきたいと思っている。その後、平成27年度には先生方を対象にノートを配布し、その翌年度くらいから子どもたち全員に配布するような形で、しっかりと地ならしをしながら進めていきたいと考えている。

委員 ノートという物理的なものになってしまうと、アウトプットとしてだけに使うような形骸的なものになる危険性がある。必要なのは、子どもたちが自分の力で物事を考えていくとか、みんなと一緒に考えて、調整や役割分担をしながら問題を解決していくというアウトカムの部分だと思うので、どう運用するか、どうすれば子どもたちに考える力をつけていけるかというソフト面をもっと深く考えていただく必要があると思う。

事務局 これまでは、例えば学級活動の中の係・当番の活動など、年度の始めに係を割り振ることがメインで、その係活動から子どもたちがどういう学びをするかという視点が薄かったように思うので、今回のノートは、そういう課題の部分を充実させていくという視点で作ろうと思っている。したがって、ノートは教科や特別活動等と別に単独で存在するものではなく、それを活用して通常の教育活動を見直せるようなものにしたいと考えて

いる。

委員

あまり細かいところにこだわりすぎると、逆に、それに縛られて自分で自分の首を絞める危険性もあるので、その点は注意が必要だと思う。

今話された役割分担なども、役割を分担することが目的ではなく、そのシチュエーションの中で自分がどんな役割を果たせるかということを見ながら考えながら取り組んでいって、ある程度進むと、また次の役割が出てくるというような活動でないといけないと思う。そういう意識を醸成させるための仕組みづくりだと思う。

事務局

気を付けて取り組んでいきたいと思う。

委員

「キャリア在り方生き方教育」の推進には私も非常に期待している。これを充実するには、子どもたちに郷土への愛着や川崎市民としての自覚をきちんと持ってもらうことが大事。資料の2つ目に「自己の役割を果たしつつ、他者と協力・協働して社会に参画し……」とあるが、地域社会自体もこの精神を理解し、取り組む必要があると思う。郷土への愛着を持たせるには、お祭り、イベントや、昔からの伝承を子どもたちに伝えていくという地域社会や社会教育の役割も非常に大事だと思う。

地域との関わりの中では、ぜひシニアの人たちに、郷土に伝承されていることを子どもたちに伝えていくという役割を担っていただきたい。そうすることで、自分自身がこれまで学んできたことを伝えることができるという充実感が生まれ、それがシニアのやりがい、生きがいにもつながっていくのではないかと思う。そういう多世代を巻き込んだいい循環が、このキャリア在り方生き方教育の実践を通してできればと思っている。

事務局

そういうこともぜひ大事にしていきたいと思う。

委員

今のご意見を踏まえると、2枚目の「期待される効果」の「地域にとって」というところの書きぶりは、何かよそ事のような印象を受ける。

委員

中学生の生活は、ほとんどが学校と家庭であるが、中学生にふさわしい地域での役割というものもある。それをきちんと果たすことで、中学生は勉強だけが自分のやることではなく、地域社会の中でも必要とされていて、担える役割があることを認識し、自己肯定感も持てるようになる。そこから地域性の育成や社会的自立につながる例が実際に結構ある。ぜひ、この取り組みの中でも地域社会の土壌と力を生かしていただきたいと思う。

委員

このキャリア在り方生き方教育というのはとてもいい経験になると思う。ただ、キャリアノートについては、親子の関係の強化にもなる半面、例えば中学生の場合は思春期で親と話したくない時期なので、うまくいかないのではないかという心配もある。

しかしながら、いろいろな面を考えると、担任の先生や学校教育の現場で、子どもが何を考えているのか全く分からないというよりは、何か1行でもそのノートにつぶやいてもらえたら、学校の先生は何かを感じ取ることができるかもしれないという期待もある。

このノートは、小学校1年生からずっと同じノートを使うのか。

事務局

小学校1・2年、3・4年、小学校5年から中学校1年、中学校2・3年の4分冊で考えている。

委員

それが切れ目なく継続されないと意味がないと思う。その子のいろいろなキャリアを見られるよう継続されていって、それが足取りとなって、やがて地域と結び付いていくというところまで、経過的に見ていってほし

いというのが親としての思いである。

委員 今まで、「生きる力」、「確かな学力、豊かな心、健やかな体」を具体的にどこで使うのかというのが疑問だったが、こういう考え方のキャリア教育があれば、それを活用するきっかけになるのではないかと思った。

これまでは、大人がある程度道筋をつくって、子どもはそれをこなしていくというような形だったが、今後は、子どもが主体的になって、自分たちで問題提起をし、考えていくという方向になっている。当事者である子どもたちが自分たちで考えて問題を解決していくとか、子どもたちが自分たちの環境を変えていくとか、自分たちがどこで役に立つのかを見つけていけるようにするために、このキャリア在り方生き方教育で学べると思うので、非常に楽しみにしている。

委員 生徒個人と学校もしくは家庭という関係だけではなく、例えばメンター制度のような形で、先輩・後輩という関係の仕組みも入れていくと、責任を持って後輩を育てるという意識も生まれ、より良いのではないかと思う。

事務局 小学校では、意図的に1年生から6年生までの縦の集団をつくるような取り組みを行っているので、このキャリア在り方生き方教育の中であらためて見直しを行い、充実を図っていければと思う。

委員 1ページ目の「社会全体の状況」について、ノーマライゼーションの視点も入れたほうが良いのではないか。今、職場でも障害者でも分け隔てなく仕事をするようになっている。そういう背景をここの中にも反映させたほうが良いのではないかと思う。

委員 それが、先ほど説明のあったインクルーシブ教育ということだと思う。

委員 先日、地域の保育園から、小学校に上がるまでにどんな力を付けたらいいかという話を求められた。そこで、今、学校で頑張っていることとして、マナーや、友達と力を合わせて問題を解決すること、人間関係を大事にしていくことが大事だという話をさせていただいた。まさにこれと非常に似ていて、この話を早く聞きたかったと思った。

川崎には「共生・共育プログラム」や「心のノート」という取り組みもあるので、今回の取り組みと従来からある共生教育プログラム、心のノート等との関係を整理することが、我々がより具体的に実践できることにつながるのではないかと考えている。

教育長が冒頭で、これは先生たちを応援するためのものだという話をされた。私としても川崎が大好きな人間なので、20年後、30年後にお年寄りや障害を持った人が共生できる社会になるよう、お手伝いをさせていただきたいと思っている。

委員 今は大きい枠で話をしているが、中学校の3年間の発達というのは大変大きいので、学級の中のもっと小さいところでの課題もたくさんあるので、そういうところにも目を向ける必要もあると思う。

小学校と中学校で、どのような形でキャリア在り方生き方教育をつなげていくかということも課題だと思う。

私の学校は保育園が併設されており、そこでの交流を通して子どもたちの新たな面を見ることができる。学校ではどうしても一方向の見方になってしまいがちなので、多面的に子どもたちを見ながら、子どもたちの良さをたくさん引っ張り出してあげなければならないと思っている。そのた

めにも、こういう教育は必要だと思った。

今言われたとおり、心のノート等と重複する部分があるので、現場の声等も聞きながら整理していただければと思う。

委員

県内に特別支援学校が48校あるが、キャリア教育というテーマには、どこも真剣に取り組んできている。ただ、これまでは高等部の就業を目指した職業教育や就業体験学習等につなげるためのプログラムとして構成されていたので、そうではなく、特別支援学校においても、子どもの成長過程で積み残されている課題に目を向けた教育活動に見直していくという考え方を示しても、職員の間では今までの感覚が強く残っており、足踏みをしているようなところがあるので、この指針は非常に参考になると考えている。小学部、幼稚部も含め、これからの子どもたちの成長にとって何が大事なのかという辺りを見直していく大きなきっかけになるのではないかと期待している。

委員

直接的には学校教育の中の話だが、これが出された時に、学校の先生方だけでなく、保護者、地域等がこれを理解して賛同し、いいことだからもっと早く積極的にやろうという意見が出るくらいになればと思っている。

我々も、今後も非常に大事な議論をしていくことになるが、ぜひ、引き続きいろいろなご意見を頂きたい。

以 上